

エッセイ

# 海の向こうの風の色

はなしで なお

一 メリーさん(カーナ)

メリーさんは赴任先で雇ったお手伝いさんだ。ある日帰宅すると、うちの門に立ち小便をしたという大男をこっぴどく叱り飛ばしていた。私は怖くなって「メリー、やめてちょうだい。仕返しされたらどうするの？」といった。すると、

「マダム、大丈夫！ だって私ね、アイツのうち知ってんですよ。アイツのうちからいつもニワトリ買ってやってんだから」

彼女は人情家で、正直で、おまけにめっぽう正義感が強いのだ。

ある日、メリーさんが私に

「門番のお母さんが病気なのでお金を貸してやって欲しい」といいに来た。いくらかのお金を渡すと門番は翌日、故郷(くに)に帰っていき、そして三日ほどで戻ってきた。

数日後、またメリーさんが

「彼のお母さんの容態が思いのほか悪いので、さらにお金が必要になった」と言ってきた。またいくらか渡すと門番は実家に戻り、今度はそのまま二度と帰ってこなかった。

メリーさんは悔しがった。「警察に届けるッ」とものすごい剣幕で怒っている。

「あきらめましょう」と私がいったら

「ノーツ！ マダム！！ 私も彼にお金を貸したのよッ」

えー？ それで怒ってたの？？ ハハハ・・・力が抜けた。

「じゃあ私たち、私が『おばかさんナンバー・ワン』で、メリーさんは『おばかさんナンバー・ツー』ね。」

メリーさんはあまり笑わなかった。

「お願いだから警察には届けないでちょうだいね」  
あまりこちらの警察のお世話にはなりたくない。

男にだまされたらしい二人の女はそれから暫し、小さな不幸を慰めあった。

数ヶ月が経ったころ、メリーさんは高熱を出した。マラリアらしい。妹に付き添われて病院へ行った。熱は四十度を超えていた。待合室の長いすで横たわり、朦朧とした中でふと薄目を開けると、廊下の向こうにあの元門番がいた。その傍らには具合の悪そうな母親らしき女性がいる。メリーさんは起き上がって「お金返せ！」と詰め寄ろうとしたが、力が湧いてこないまま、また意識が遠のいた。彼女が再び目を開けたとき、門番たちはいなくなっていた。「体がとてもしんどかったの」と彼女は後日、弁解した。

薬が効いたか熱が下がり、メリーさんは早々に我が家に復帰した。

「やつぱりあの時、起き上がって、彼をとっ捕まえて『お金返せ』と言ってやればよかった」と大いに息巻いている。

マラリアは完治したようだ。

二 松葉杖(ミヤンマー)

仲良しの女医さんが、レントゲン写真を持ってきた。

「ねえ、これ見て」という。こどもの右足の折れた骨が写っていた。だが整形外科医はこの町にはいない。

「病的骨折の疑いがあるので、隣の整形外科に送りたいんだけど…」

どうも、治療費が足りない、という「相談」らしい。

病棟にそのこどもを見に行ったら。五歳の男の子だった。ベッドに腰掛けていたが骨が折れている右足はぶらぶらしていた。でも、泣いてはいない。泣きたいのをこらえているようだった。

母親が傍にいた。顔色は真っ青で、鼻には酸素吸入用のチューブがつけられていた。彼女は二年前から慢性呼吸不全で

入退院を繰り返している。水牛を売り、田んぼを売りして治療を続けていたが、一向によくならない。家にはもうすでなにもない。そこへきて男の子が骨折した、という状況のようだ。母親は肩で呼吸をしながら、ただ悲しげに傍らで男の子を見つめていた。話を聞くまでもなく、またカルテで確かめるまでもなく、彼女がこの世に長くどまれないことは容易に推測できた。

三週間後、治療を終えて隣町から戻ってきた男の子と再会した。父親と一緒にだった。男の子はギブスをし、松葉杖をつけていた。父親に促されて彼は、自宅で取れたという青いパツシオンフルーツを私に差し出した。男の子の顔はまた、泣きたいのをこらえているように見えた。母親は退院し自宅で療養している、とも聞かされた。

一週間ほどが経った。男の子の母親が、亡くなったと知った。彼は葬式の列に加わり、松葉杖で歩いていそうだ。悲しげな眼で男の子を見つめていた母親は、どんな思いで逝ったのだろう。あの苦しい呼吸の下で、なにを息子に語る事が出来たのだろうか。そしてあの時の、泣くのをこらえたような男の子の表情は、この時を予感したものだったのだろうか。

パツシオンフルーツが実る男の子の村から病院までは、乗

り合い耕運機で五時間もかかることを、思い出した。

### 三 印刷屋のハリー（ネパール）

青年海外協力隊でネパールにいた頃だ。ハリーは友人宅の家事手伝いをしている青年だった。なんでも家が貧しく、小さい頃に田舎から出てきて住み込みとなり、働きながら小学校と中学校を卒業したという。定時制高校は一度中退したものの、「やっぱり学校は大事」と再入学。朝と夜は友人宅の家事を手伝い、昼は近くの会社で下働きをしながらカトマンドウの学校まで通っていた。

ハリーは背が高く、寡黙だった。まだ二十歳だというのに、人生のすべての苦悩を知ってしまったような顔をしていた。

あるとき雨が続いて、私が借りていた家は水びたしになった。断水と停電まで重なる、その片付けに大わらわとなった。友人はハリーを派遣してくれた。彼が黙々と片付けをこなしてくれたので、おおいに助かった。これをきっかけに、ハリーが床屋へ行く時や教科書を買う時には、こっそりお小遣いを渡すようになった。彼ははにかみながら、しかし、にこりともせずに受け取った。

しばらくして、ハリーは高校を卒業することになった。卒業式の晴れ着は、男性隊員が事務所忘れていった協力隊の紺色のスーツだった。

やがて協力隊の任期が終り、私は帰国した。その後、日本で受け取った彼からの手紙には「印刷機を一台、借金して買いました」とあった。

十数年の時が流れ、とある調査でふたたびネパールを訪れることになった。ハリーと再会した。彼は八人の社員を雇う印刷会社の社長になっていた。一九九〇年の民主化以降、ネパールでは言論の統制がなくなって印刷物が増え、彼がたったひとりで始めた印刷屋は大当たりらしい。身分制度が厳しいネパールで、「カーストが違う」と結婚に大反対だった上級カーストの妻の両親も、ハリーのガッツと経済力に折れたらしい。二年前に結婚し、カトマンドウに家を建てたそうだ。妻とは高校卒業後に進学したカレッジで知り合ったという。生後八ヶ月のかわいい娘も見せてもらった。

私はハリーに、調査で使うアンケート用紙十三ページ・五百部の印刷を発注した。すると彼はたった一日でそれを仕上げてくれた。印刷代を払おうとすると「お姉さまのことだから結構です」という。私は

「正規の料金を言っただけ」と頼んだ。

いまや三十代も半ばとなったハリーは娘をあやししながら、「お姉さま、床屋代はもう自分で払えるようになったんですよ。卒業式に着たスーツは今でもしまっておりまして」と笑顔で答えた。

彼は人生のすべての苦悩に加えて、喜びも知ったらしい。

### 四 ラクシュミー（ネパール）

ヒンドウの富の女神はラクシュミーという名前である。手のひらから金貨がどんどん出てくるらしい。それにあやかってか、ネパールでは大勢ラクシュミーという名前の女性がいる。

ある村で調査をしていたときのことだ。五、六人の村人たちとお茶を飲んでいたら「病人がいるので見てほしい」と言われた。それは二十四歳の娘で、何でも十四歳の時にインドのボンベイに売られて、その後十年間、行方が分からなくなり、三ヶ月前に戻ってきたそうだ。その時すでに体調が悪く、やつれ果てていたので村人たちは病院に行くように勧めたという。みんなはお金をかき集めて娘の父親に渡したが、彼は

それで酒を飲んでしまい、病院には連れて行かなかった。やがて娘は起き上がることが出来なくなり、寝たきりとなった。村人たちは「悪い病気」だと判断し、近くの小川のほとりに小さなビニールの家を建て、彼女を隔離した。「悪い病気」とは、エイズを意味しているようだ。

大きなマンゴーの木に寄りかかるように建てられたビニール小屋にはベッドがひとつだけ置いてあり、そこにやせ細った娘が浅い呼吸をしながら横たわっていた。近寄ると娘は大きな目を開いた。それは美しい娘だった。

日本でなら中学生にあたる十四歳の時から、この娘はどこでどんな風に生きてきたのだろう。楽しかったことはあっただろうか。嬉しかったことはあったのだろうか。その十年間は想像するだけでも胸が苦しくなった。そして今、彼女はようやく帰り着いたふるさとの村の片隅で、こんなにか細い呼吸をして横たわっている。

娘の傍らに立ちながら、言葉は喉に引っかかって出てこない。たった一言の「ナマステ」さえも。

ようやく心を整えて、娘の手を取り

「バイニ(妹よ)、名前はなんていうの?」と訊いた。

娘は一呼吸おいて

「ラクシュミー」と消え入りそうな声で答えた。

私はラクシュミーの心が楽になる言葉を必死に探した。だが、なにも言えなかった。

そんな言葉はなかったのだ。

女神と同じ名前の娘は再び目を閉じて、最後のエネルギーを使って呼吸を続けた。

二日後、小川のほとりの小さなビニールの小屋は解体された。

註 \* 呼びかけの言葉

|||||

仲介者あとがき

はなしで・さんは長年、国際医療協力に、それこそなんの私利私欲もなしに貢献してきたスーパーボランティアである。自ら主宰するモノの機関誌にエッセイ風の体験記を載せてきた。彼女のキャラクターが絶妙な柔らかさで包み込んではいるものの、そこには何物にも代えがたい事実の重みがある。現実を突きつけ、心を打つ鋭さがある。

今回、頼み込んで転載の許可を得た。誌面の制約や事柄の背景などで、<sup>20</sup>外の読者には分かり辛いと思われる部分についての加筆、編集も了解してもらった。だが今号の掲載分は「はなしでさん」のエッセイのほんの一部ではない。次号以降でもぜひ、掲載の許可を得て紹介しようと思っている。期待されたい。

なお、著者名の「はなしで」は、掲載に当たって署名をどうするか問い合わせたところ、「ペンネームはなしで」とあったため、それに従った。この件に関する了解はこれからだ。

稲瀬 隆(いなせ・たかし)

\* なお、本誌第35号に掲載された稲瀬隆氏の作品に、感想が寄せられましたので、以下にご紹介いたします。

同人誌をお送り頂きありがとうございました。稲瀬隆氏の作品「ボクが死んでから気づいたこと」について意見書を送らせていただきます。もしかして私のことをどこかで観ていてそれを小説にされたのでは?と思わせるものです。(中略)死については私にとっても永遠のテーマであり、中学生の頃より夢に出てきてうなされる時期が断続的にありました。現在ではうなされることはありません。自分の過去を含めて全てに感謝できるよう努力する事により、あとどれくらいあるか分からない命を精一杯真当しようとしているからです。(中略)浄土宗の一派、大徳寺派の一遍は「生ぜしも 死するもひとり 柚子湯かな」と詠んでいます。この句は、全く別の世界からこの世に出現し、新たな世界に旅立つ一瞬は全て一人であり、現世のしがらみから一切、切り離され、人生の冬至を迎えるものである、と解釈して、自身に暗示を掛けている次第です。またお会いすることを楽しみにしております。

澤邊正敬